

9月・10月の管理ポイント

平成23年8月25日



株式会社 トモグリーンケミカル

今年は梅雨明けも早く、8月も昨年に比べると猛暑日も少なく、比較的芝のダメージも少ない感じがしましたが(地域差はかなりあると思いますが)、これから残暑、秋雨前線に伴う大雨・台風等、気の抜けない日々が続きます。秋の生育期に向けて、少しでも弊社商品がお役に立てばと思っております。

ホームページアドレス
<http://www.tomo-green.com/>

第113号



グリーンメカ・マリンパワー・光合成細菌

芝の呼吸過多による糖消費と土壌菌数の回復に...

残暑の厳しい9月は高温による芝の呼吸量が増加し、糖含有量は減少します。また、10月に入るとベントの生育期となり、糖の消費量も増大します。

糖が少なくなると特に根に影響を与えるので、**グリーンメカ**でしっかり補給していきましょう。

7月、8月の高温ストレスから、少しでも早くベントを回復させるために、土壌中の硫化水素など根に直接影響を与える有害ガスを軽減させましょう。**光合成細菌**と**マリンパワー**を組み合わせることによって、嫌気性の土壌(排水の悪いどぶ臭い土壌)を改善し好気性の有用菌の定着を目指します。

使用量：グリーンメカ 5~10ml/m² マリンパワー 2~4ml/m² 光合成細菌 1~10ml/m² 0.5~1.0L/m² 散布



サッチ・リムーバー

サッチ層の除去には...

9月の更新作業時に**光合成細菌**+**サッチ・リムーバー**で、グリーンのサッチ層を軽減しましょう。

他の微生物由来のサッチ分解剤とは異なり、酵素製剤なので土壌中でも安定して働きます(又農薬との混用もOKです)。分解されたサッチは、糖類やチッソ源となり、植物や他の微生物のエサとして再利用されます。

使用量：1~2g/m² 0.5L/m² 散布 使用回数：月1~2回



プライマーセレクト・アクアダクト(SWDG)

残暑に備えて均一な水分分布を...

残暑の厳しい9月は、油断するとすぐにドライスポットが出てしまいます。

プライマーセレクトを処理することによって、均一な水分分布を目指し、乾燥害からグリーンを守りましょう。ドライスポットを出してしまったら、速効性のアクアダクトを処理して、すばやく回復させましょう。

使用量：1~2ml/m² 200ml~1L/m² 散布、SWDG(粒剤)：10~20g/m² 散布回数：プライマーは1ヶ月~1ヶ月半に1回、アクアダクト(SWDG共に)は随時使用



スティンガーフロアブル・ガードワン水和剤・

害虫多発生時のローテーション散布の一剤として...

9月、10月はスジキリヨトウ・クシナシスジキリヨトウ幼虫の発生をはじめ、タマナヤガ幼虫、ツトガ幼虫と多種の害虫が活発に活動する時期です。

殺虫剤の散布回数が多くなる時期ですから、薬剤の耐性予防としてローテーション散布を行ないましょう。

スティンガーFLは、従来の系統とは異なる新規殺虫剤で、薬剤耐性の問題もなく、食毒効果が長期間期待できるので、チョウ目害虫が多種混在するこの時期には最適です。

またガードワン水和剤も、IGR剤(脱皮促進剤)なので、有機リン系やカーバメート系、合ピレ系を使用しているゴルフ場にはローテーション散布の一剤として、この時期に安定した効果を発揮します。

使用量：スティンガーFL 4000倍 0.2L/m²、ガードワン水和剤 4000倍 0.3L/m²



カラーマーカー®・L

除草剤散布時の識別剤として...

その名の通り除草剤散布時の着色識別剤(カラーマーカー)として利用して下さい。

食用色素を成分としてありますので、安心してお使いいただけます。

使用量：3000~5000倍 (倍率は芝生や主剤の色合いにより自由に加減下さい)

貯蔵養分について

芝草の刈込が続く条件下で、茎葉や根の伸長を維持し、新しい分けつを促すには、養分の生産、貯蔵が不可欠となります。芝草の貯蔵養分には、暖地型と寒地型でそれぞれ種類が違います。暖地型芝草は「でんぷん」、寒地型芝草は「フルクタン」で、この貯蔵養分をエネルギーとして利用するには、酵素によって加水分解され、単糖類(グルコース、フラクトース)に分解されることが必要になります。

貯蔵養分の分解

暖地型芝草

ノシバ
コウライシバ
バミューダグラス
etc

でんぷん

寒地型芝草

ベントグラス
ブルーグラス
ライグラス
トールフェスク
etc

フルクタン

単糖類

グルコース
フラクトース

でんぷんを加水分解するには芝の地際の温度が25℃以上必要(平均気温で10~12℃ぐらい)。

フルクタンの加水分解は、低温で十分。平均気温5℃から生育を開始する。

貯蔵養分の蓄積場所は？

貯蔵養分の蓄積場所として、最も大きい場所は、**茎の節間の透明柔組織**、2番目は**葉鞘基部の透明柔組織**といわれています。また、貯蔵器官の大きさは、器官の形成が小さい場合は蓄積容量が小さくなります。

グリーンのクオリティ向上のため、芽数増加、葉幅の細かい芝(芽の小型化)が好まれる現在の管理では、**必然的に貯蔵器官の形成が抑制される傾向にあります**。

高密度のグリーンを維持するためには、今後、糖類資材の活用も見直されていくのではないのでしょうか。